

第269回 番組審議会

1. 日 時 平成30年2月13日(火) 12:00～
2. 場 所 メトロポリタン盛岡NEW WING 3F「星雲 東の間」
3. 委 員 委員総数 8名
出席委員数 7名(欠席委員数 1名)

○ 出席委員(敬称略)

鈴木 厚人(委員長)

—以下50音順—

石田 征広

加藤 裕一

久慈 浩介

菅原 正二

八木橋 伸之

役重 真喜子

○ 会社側出席者(8名)

藤澤 利憲 (代表取締役社長)

小原 忍 (取締役副社長)

藤原 銀司 (常務取締役)

前田 秀男 (取締役技術局長)

工藤 浩 (取締役東京支社長)

高嶋 昇 (取締役営業編成局長)

工藤 哲人 (報道部主任)

鎌田 淑子 (制作部チーフディレクター)

○ 事務局 佐々木 久仁子

4. 議題 『映画監督・大友啓史と旅する新渡戸稲造の青春
～ドイツ留学と武士道～』
平成30年1月21日(日) 13:00～13:55

5. 議事概要

今回は、1月21日日曜日午後1時から放送した「映画監督・大友啓史と旅する新渡戸稲造の青春～ドイツ留学と武士道～」について審議しました。議事の概要は、以下の通りです。

●岩手めんこいテレビ報道部 工藤哲人プロデューサーからの説明

・この番組は、新渡戸稲造武士道シリーズの5作目にあたる。新渡戸研究においてドイツ留学時代のことがほとんど語られていない。しかし、彼が国際的に活躍する素地はドイツで得たに違いないという確信があり研究を重ねた。留学先のボン大学やハレ大学でベートーヴェンやゲーテ、シラーなどの影響を受けたと思っている。

・大友啓史監督に出演して頂いたのは、「神棚に祀り上げて『すごいんだ稲造は』と言っても何の得るものもない。僕らの時代にどういう意味があるのか、僕らの目線で見えていかないと」というところで、考えながら、議論しながら2週間ほどの撮影旅行を行った。当初、アウシュヴィッツに行くべきか悩んだ。個人の人格、人生を目指す教育論に至った新渡戸と対極にあるのが、人格を抹殺していくホロコースト。やはりポーランドを目指さなくてはということになった。

●岩手めんこいテレビ制作部 鎌田ディレクターからの説明

・番組を見て、「あわただしい番組だな、視聴者を置いてけぼりにしているんじゃないか」と思われたかもしれない。悩んだ結果、確信犯でそうした。新渡戸を初めて見る人もいたと思うが、その説明からはじめると番組が終わってしまうので、工藤と相談し、そこを分ってくれた人に見てもらおう番組があってもいいんじゃないかということで制作した。

・新渡戸がドイツにいたのは、3年ほど。多感な20代、多くの刺激を受けて吸収し、新渡戸の晩年に活かされたのも確か。大学など行った先々にいろんな資料が残っていた。多くの功績を残した偉人を説明することで、新渡戸のことをより分ってもらおうという手法を取った。

●出席した委員からの意見

- ・新渡戸のドイツ時代の話はあまり知らないし、青春時代メアリーと文通していたということも知らなかった。そういうところに光をあててもらったのは良かった。
- ・アウシュヴィッツについてユダヤ人は、絶対にそれを残さなければいけないと思っている。出して良かった。
- ・アウシュヴィッツは、すごい映像で、本物がもつ迫力があつたが、新渡戸からそれに繋がっていく導線をもう少し説明してほしかった。
- ・基本的な知識をもつ人にとっては見ごたえのある番組と思うが、そうでない人には消化不良かなと思った。
- ・最初からあまり説明しないで、上からいく番組があつても良い。そのスタンスは高く評価する。
- ・ベートーヴェンの「交響曲第九番 歓喜の歌」の使い方が効果的だった。
- ・良い形でまとめて、全国放送する方向を考えてほしい。
- ・盛りだくさんではあつたが、映像でさつと説明していて、非常に楽しく、そこがテレビの良いところだと思った。
- ・ヒトラーが大演説をしたビアホールの2階からの映像は、テレビらしい、良い映像が撮れていたと思う。
- ・年号について、西暦と和暦を（）で書き分けて、どちらも表記してもらった方が、時代感覚としても分かりやすいのではないか。
- ・岩手のテレビ局が、岩手の人の番組を制作するのだから良いところだけではなく、悪いところもきちんと紹介しておいた方が良いと思う。
- ・地名が出るたびにどこにあるのか分るように地図テロップが表記されたり、画面の作りがきめ細やかで、見やすいように配慮されていた。また、色合

いなど一編の映画を見ているような美しさがあり、鎌田ディレクターのセンスの良さが伝わった。

- ・全体を通して、一番言いたかったテーマは何だったのか。あれこれ盛り込むのはいいが、これを盛り込んだのは「何を言いたい」ためという、一つのところに収れんしてくる訴え方をすると、見ている人に届くのではないか。

- ・ナビゲーターとしての大友啓史監督の位置付けが、いまひとつ良く分らなかった。

- ・最後に大友啓史監督の語りがあったが、あれは見た人が感じるもの。見た人に任せて欲しい部分で、説明し過ぎず、余韻を残す形であっても良かったと思う。

- ・単純に郷土の偉人伝ではなく、番組の価値を全国的にもしくはもう少し広げて、ということ考えると絞込みのテーマが必要だったのではないか。

- ・アウシュヴィッツをなぜ取り上げたのか、まだ腑に落ちないところがある。

- ・最後の雪原と「第九」の取り合わせが、何となく落ち着かない感じがかった。

- ・武士道とは直接関係がないのにアウシュヴィッツのシーンが結構長く、違和感があった。

- ・グローバル人材育成という点から、新渡戸は非常に模範的な人。さらに札幌農学校、東京大学に入り、それでも我慢できずにボン大学に留学しているが、このバイタリティは一体どこからきたのか。これを探ると、これからの人のためになるのではないか。

6. 審議機関の答申又は改善意見に対してとった措置

特になし

7. 審議機関の答申意見概要を公表した場合におけるその公表内容、方法及び

年月日

※平成30年1月10日（水） 産経新聞 東北版

※平成30年1月20日（土）午前4時12分から4時15分まで「めんこいテレビ番審りレポート」として放送

※据え置き書類を作成し、本社受付に置き一般の人々が自由に閲覧できるようにした

8. その他の参考事項
特になし

※次回は、平成30年2月13日（火）12時より当会場にて開催予定です。